The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中学校における国語の評価について
Author(s)	舟守, 聰
Citation	語文. 1954, 12, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68461
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中学校における

国語科の評価について

舟守　聰

中学校における国語科の評価が、まづどういう目的でなされるかということを考えてみると、

一、学習指導の方法を反省する資料とする。

二、学習活動の結果到達した段階を明らかにする。

三、修得単位の合否を決定する。

他にもいろ〳〵な理由・目的は考えられるが、実際的には、まづ右の三点に要約できると思う。こうした仕事はすべて文部省の「学習指導要領」の示すところであるのはいうまでもない。中学校においては、高等学校におけるごとく終極的には三の目的のために評価を行うというよりも、現実には、ある期間における、ある生徒の学習結果を、他生徒との関連において相対的に位置づける、ということのため二の目的で行われていると考えてもよい。その場合にとられるのが所謂、正常分配曲線による五段階法である。この方法は三千人とか六万人とかいう多数を統計の対象とするのなら、また合理性を認めもされよう。だが、これが、同一学校の、同一学年において、学級差も考慮せずして学級毎にこの方法が、いま現に、全国殆んどの中学校で行われているのである。即ち、A組では5が二人にあたえられている。しかしその実力はB組の4の者と同じである。一方B組には成績の割合良い者が多いために、A組にいたら5を貰

える者でも、4しか貰えないということが常に起つている。しかも実際にはそれが「指導要録」(学籍簿)に記載されるのだから一層不都合である。またこの方法では、各期毎の努力乃至は進歩の程度、状況を端的に数字で伝えることもできない不便がある。

さらに「指導要録」が示す目標が、余り分析に過ぎていて、評価をする者にも、される側にも不便だということである。

——ぼく　国語は5が二つと　4が二つでした。

——わたしは　5がたつた一つで　あとは3と4でした。

——それ　どんな項目だつた?

——さあ?　それは見ませんでした。

こうした会話がかわされるのは中学校ばかりでなく、高等学校にも常にあることらしい。

われわれは現在させられている評価の方法に、多くの矛盾と疑念とを感じている。一部で試みようとしている「ことばによる評価の表現」は主旨は結構、といえても、一週二十三四時間まで授業しなければならない国語教師の実状からいえば、これもまた困難なことで、良心的な処理を期待できない。結局、綜合評価一本で、それに幾らか現行四目標のごときものを加味した表現を加え、十点法を採用し、分配曲線を参酌せず、というのが、最も実際的・能率的・効果的な評価方法ではなかろうか。教師は良心に恥じず、生徒父兄からも十分信頼される評価方法への切換えを熱望している、というのが実情ではないかと思う。

——和泉大津市立第一中学校教官——